第 100 号　2017 年 7 月 31 日

東日本大震災　復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

『東日本大震災　復興･支援活動ニュースレター』の第１号を発行したのは、2011 年４月 30 日のことでした。以来、月に１回～２回の発行で、みなさまに大震災で被災を被った各地の様子、ボランティアの方々による貴い支援活動のご紹介、各ベースの設立、動きなどをお知らせしてまいりました。そして、今回の 100 号には、仙台教区サポートセンター長として、ずっと心を配り、責任をとってきた平賀徹夫司教、カリタスジャパンの責任司教である菊地功司教、カトリック東京ボランティアセンターの責任をとっておられる幸田和生司教の３人に原稿をいただくことができました。それぞれのお立場から書かれた生きた支援活動の有様をごらんください。今後ともよろしくお願い申し上げます。

ニュースレター１００号によせて

仙台教区サポートセンター　センター長　平賀　徹夫　（仙台教区司教）

東日本大震災発生から６年４か月が経ちます。そして仙台教区サポートセンターの『ニュースレター』は第１００号の発行を迎えることになりました。これにどういう意味を見ることができるでしょうか。聖書にある次の一節が丁度、当てはまるような気がします。

「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。…被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです」（ロマ書８章１９、２２～２４節）。

2011 年 3 月 29 日　岩手沿岸被災地慰問

あの大地震・大津波は筆舌に尽くせない大被害をもたらし、人々の生活と思いを一変させました。直接の被災者となってしまわれた人々には文字通り塗炭の苦しみを味わう原因となるものでした。生活の資のすべて、そして希望さえも失うという“どん底”を味わわせられたのではないでしょうか。でもそれはその痛みに心を寄せる人々にとって、苦しみを共にしたいという善意を奮い起こさせられる契機ともなったのでした。みんなで“絆”を編み直し、できる限りの力を合わせて復旧・復興にあたりました。第１００号を迎えるに至るニュースレターには、その歩みがつづられています。被災地に建てられたベースを活動拠点として、被災された方たちに寄り添おうと、北は北海道、南は九州・沖縄から心が届けられ、活動が展開されました。学生さんたちや音楽家のグループ、専門の技能･技術を持っている人も特にない人も、等々、いろいろな年代のボランティアさんたちが来てくださいました。本当にありがたいことでした。現在は災害復興住宅建設もずいぶんと進み、表面上は落ち着きが取り戻されてきたように見えます。今後は外見に現れてこない部分へも届く絆が求められるのではないかと思います。

一方、福島第一原子力発電所爆発事故への対応では大変な状況がずっと続きます。廃炉や放射能除染等といった目に見える復旧にすらこの先どれほどの年数がかかるか明確には言い得ない状況です。被災した故郷を追われて避難された方々の中には、新しい土地での新しい生活を選ぶという人も少なくないようです。この先の暮らしのためにどのような選びをするにしても、大震災被災を通して身に染みて体験した人と人との絆の価値・尊さが、これからの生きる力となってくれればよいと願います。

「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」ということです。被災して痛みを抱えた方々とその方々に寄り添い、苦しみを共にしたいという方々との絆は、切に待ち望まれている“神の子たち”の心そのものの現れなのではないでしょうか。そして誰であれそのような心をもっている人は皆、神の国を現出させる“神の子たち”と呼ばれるのだろうと思います。

平賀司教が震災後、大船渡教会を訪れた際の様子。
写真左側上が大船渡教会と幼稚園の敷地。直下まで津波が押し寄せ、
すんでのところで幼稚園バスが流されるところであった。納骨堂は流された。
（ニュースレター第 1 号に掲載された写真）

現在では、新たなフェンスや擁壁工事が施され、道路沿いには、津波避難場所の看板も設置されている。周辺には、新しい住宅も建設されている。

決して忘れることのできない日　3.11

カリタスジャパン責任司教　菊地　功　（新潟教区司教）

人生の中には、決して忘れることのできない日が存在するものです。その日どこで何をしていたのか、はっきりと記憶している日。２０１１年３月１１日は、多くの人にとってそういう日であることでしょうし、わたしにとっても決して忘れることのできない日です。

あの日から今日に至るまで、仙台教区のみなさまをはじめ、全国の教会関係者、そして国内外の多くの方々が、実際に被災地に出かけたり、募金に協力したりと、それぞれの方法で、教会の被災地支援に携わっておられます。感謝申し上げます。

日本ではこういった大規模な災害にあたり、警察や消防、そして自衛隊と、公的な支援が即座に初動展開します。ですから、教会として、また特にカリタスジャパンとして、初動展開の後にどのような取り組みが可能なのか、震災発生直後に一刻も早く見極める必要がありました。しかしそのためには、どうしても現場に行かなくてはなりません。

３月 16 日に、さいたまの谷大二司教(当時)と一緒に、二台の車で仙台へ出かけました。ガソリン供給も滞り、鉄道も高速道路も閉鎖。新潟から山形市を経由して、雪の峠を二つ越えて、一般道で仙台へ到達。

迎えてくれた平賀徹夫司教様も、事務局長の小松史朗神父も、そして救援活動の話を持ち込んだわたし自身やカリタスジャパン関係者も、その後の取り組みがこんなに大規模になり、こんなに長期にわたるとは、想像もできませんでした。その日のうちに、元寺小路教会の司教区センター二階会議室を貸していただき、仙台教区サポートセンターが発足。一緒に出かけたカリタスジャパン秘書の成井大介神父（神言会）と職員の稲江佐和子さんは、そのままスタッフとして仙台に残ることに。その日は、静まりかえった仙台の街に衝撃を受けました。また４月になってやっと訪れた故郷の宮古市。田老で見た惨状には声を失いました。

復興支援の取り組みは、自ら「オールジャパン」などと称しているとおり、全国の教会で一致して取り組むことが司教団で決められており、その活動は 2021 年 3 月末まで続きます。

カリタスジャパンは、国内の募金と、海外は特に米国カリタスからの資金援助を受けて、この全国の教会による復興支援活動を側面から支えています。そのため、「カリタス」の名前を、現場の多くの活動で名乗っていただいています。

「カリタス」の活動は、単にカトリック教会の NGO 活動ではありません。それは、教会の欠くことのできない本質的要素の一つとしての愛の奉仕活動です。また「カリタス」の活動は、教会の存在と切り離すことができないがために、災害の前にも、災害の最中にも、そして災害の後にも、常に地元の人々とともにある活動だといわれます。教会は、災害の前にも、最中にも、そして後にも、常に地元に根付いて存在しているからです。ですから、復興支援活動の主役は仙台教区であって、それを皆で支えているのです。

教会共同体がこの東北の地にある限り、「カリタス」の活動は続いていくのです。

2011 年 3 月 16 日　サポートセンター立ち上げ会議

2011 年 3 月 16 日　被災状況視察（宮城県多賀城市）

2011 年　国際カリタス総会にて

新潟教区から毎年寄せられる霊的花束

福島県浜通り北部の状況とカリタス南相馬

カトリック東京ボランティアセンター（CTVC）　幸田　和生　責任司教（原町教会担当）

わたしは昨年 12 月から福島県南相馬市原町区に滞在しています。ここは福島第一原発からは 20km 以上離れていますが、20km 圏内は何年もの間、避難指示が出されていて、居住が許されませんでした。最近は、この 20km 圏内でも避難指示の解除が進んでいます。特に今年 3 月 31 日と 4 月 1 日には、帰還困難区域を除く浪江町と富岡町の一部、飯舘村の大部分や川俣町山木屋地区で人が住めるようになりました。

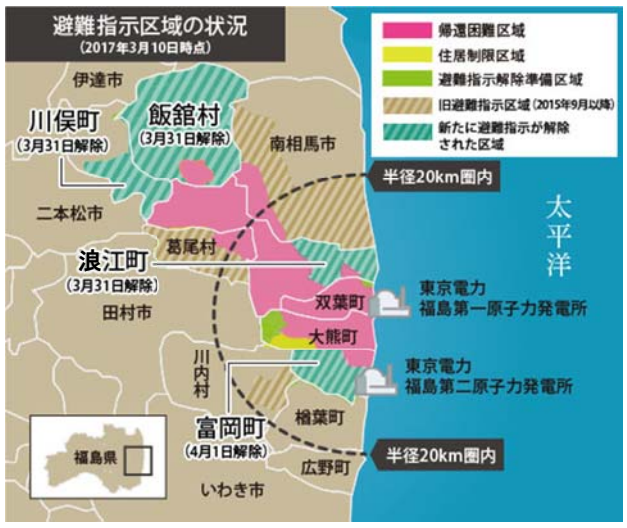
カリタス南相馬は旧カリタス原町ベースが移転して、昨年 12 月にオープンしました。20km 圏内の南相馬市小高区では昨年 7 月に避難指示が解除され、常磐線も原ノ町～小高間が開通しました。この春、小高工業高校と小高商業高校が統合されて、新しく小高産業技術高校が開校しました。これまで避難先の原町区の仮校舎に通っていた新 2 年生・3 年生も含めて 500 人以上の高校生が新設の小高産業技術高校に通っていて、町に若者の姿が見えるようになりました。小中学校も再開されていますが、こちらの生徒・児童数はとても少ないようです。小高区の元の人口は 13,000 人ですが、現時点で 2,000 人ほどの方が小高に帰っているそうです。

浪江町も山側の多くの部分が帰還困難地域ですが、海側の人が多く住んでいた地域では居住が許されるようになりました。小高駅から浪江駅までの常磐線が 4 月 1 日に開通しました。しかし海岸に近い請戸（うけど）地区ではほとんどの家が津波で流されてしまい、町の再建の兆しはほとんどありません。駅周辺にもほとんど人の気配がありません。店舗は町役場にある仮設商店街（まちなみマルシェ）の他は、コンビニ、ガソリンスタンドぐらいです。学校も病院も再開されていませんし、帰還した方はせいぜい 200–300 人ではないかと言われています。

被災者と言ってもそれぞれです。かつて住んでいた家に帰るにしろ、自力で新しい住居を手に入れるにしろ、仕事も見つけ、それなりの生活の基盤ができつつある人も少なくありません。しかし一方では、避難指示が解除されても、かつての我が家は小動物に荒らされてとても住める状態ではなく、来年３月になれば避難先の仮設住宅や借り上げ住宅の退去が迫られることになり、どうにも先が見えずに、追い詰められていく人たちもいます。補償金に頼った６年間を過ごし、仕事から遠ざかっていたために、働くことが難しい人もいます。そしてそのような困難を抱えた人々のほうが孤立しやすい傾向があるようで、サロン活動のような場にも、そのような方々はなかなか出てこられないのが現実です。この人たちとどう出会い、関わっていけるか、これは大きな課題です。

小高や浪江では、今も屋外作業のボランティア活動が続いています。庭の木の伐採や草刈りが主な仕事です。このような活動のために全国からやって来るボランティアにカリタス南相馬は宿泊場所と食事を提供しています。またカリタスのホールでは日曜日以外の毎日、仮設住宅を出た人たちを中心とした「眞こころカフェ」も行われています。もちろん誰でも参加することができ、地域の閉じこもりがちな高齢者が気軽に行ける場として認知されつつあります。カリタス南相馬は教会敷地内に引っ越したため、原町教会・さゆり幼稚園との協力関係も深まっていますし、地域の方々との交流も増えています。

カリタス南相馬がこれからも、地域の中で弱い立場に置かれた人々、困難を抱えている人々と共に歩んでいくことができるよう願っています。



避難指示区域の状況(2017 年 3 月 10 日時点)
出典元 「THE PAGE」
当該記事:【図】福島第一原発事故から 6 年
避難指示区域の指定の状況は？
URL:https://thepage.jp/detail/20170311-00000003-wordleaf

福島県データ(2017 年 6 月末時点)

応急仮設住宅等入居者数	19,356 名
県外避難者数	35,661 名
災害公営住宅(地震･津波等被災者向け)	進捗率 100%
復興公営住宅(原子力災害による避難者向け)	進捗率 71.9%
災害公営住宅(帰還者向け)	進捗率 29.4%

(※数値は、福島県･復興庁 HP より)

【カリタス南相馬の活動】

カリタス南相馬と眞こころカフェのスタッフ

ホールでの演奏会

預かり保育のお手伝いをしているさゆり幼稚園バザー

東日本大震災　被災地の今

震災発生後に岩手県や宮城県で撮影された各地の当時の様子（写真左）と、今現在の姿（写真右）を各カリタスベーススタッフのご協力のもと、ご紹介します。月日が経つにつれ、メディアで取り上げられる機会も減り、良くも悪くも記憶が薄まり、当時のことを忘れつつある昨今、特に被災地から離れた場所にお住まいのみなさまに対し、これからも被災地に関心をお寄せいただき、今後いつどこで起こるかわからない自然災害について考える機会にしていただければと思い、今回、震災後の痛々しい姿を掲載させていただくことにしました。また、被災を受けた地域と言っても、被害の大きさや復興の進み具合、被災された方々の置かれている状況が異なります。今なお、復興途上にある地域が、各県に多くあることを写真を通して少しでも知っていただき、今後も引き続きご支援・ご協力をいただければと思います。

【岩手県宮古市田老地区】

(2011 年 3 月)自衛隊車両や自衛隊員の姿が見られた。写真左の高い建物は、「たろう観光ホテル」。

(現在)災害危険区域に指定され、住宅等を建築することが制限されている。写真中央の建物は、震災遺構の旧「たろう観光ホテル」。写真右には、田老町漁業協同組合の加工場などが見られる。

【岩手県宮古市築地地区】

(2011 年 3 月)写真左側にすぐ海があり、津波により壊れた家屋や信号機などが道路脇に重なっていた。写真中央を走る道路は国道 45 号線で、主要道路のため、いち早く瓦礫が撤去され、道路だけはきれいに片付いていた。また、信号機が消えており、まだ電気が復旧していない時期だった。

(現在)津波の被害があった地域だと一見、わからない景色となっている。

【岩手県大槌町】

(2011 年 12 月)写真中央の建物が、大槌ベース開所時に使用していた旧「寿ホテル」。

(現在) 写真右中央付近にある赤い屋根の建物は、被災時、寿ホテル右手にあり、ほぼ同じ場所で現地再建した喫茶「夢宇民(ムーミン)」

＊寿ホテルは場所を変えて、既に再建。

末広町(中心市街地の町方地区)の復興も少しずつではあるが進んできて、今年 8 月 12 日には震災前に行われていた夜市が再開される。まだまだ全部の商店などが戻ってきたわけではないが、出来るだけ早く震災前の町を取り戻そうとしている姿勢だと感じる。これから鉄道の復旧に向けても大槌駅の在り方など、町では震災から 6 年以上過ぎた今でも難題が点在しているようである。 (カリタス大槌ベース　片岡英和ベース長より)

【宮城県南三陸町】

<u>志津川高校から撮影</u>
(2011 年 5 月)
あちこちに瓦礫が散乱し、主要道路以外は、まだ確保されていない状態。

(現在)畑や道路は整備されているが、左奥では、未だ大規模な工事が行われている様子がみえる。

<u>志津川小学校から撮影</u>
(2011 年 10 月)
大きな瓦礫などがまとめられ、道路も確保されている様子がわかる。

(現在)かさ上げ工事が進み、中央斜め左奥には、今年オープンしたさんさん商店街が見える。

【宮城県石巻市】

(2011 年 5 月)日和山から南浜・門脇地区を撮影した写真。瓦礫や被災車両などが道路脇に退けられ、道路は通行可能となっているが、それ以外の場所はほぼ手つかずの状態。多くの家が建ち並んでいた地域とは思えない光景。

(現在)日和山は、木々が生い茂り、以前のように撮影することができなかった。違う場所から撮影すると、かさ上げ工事が完了し、空き地は多いが、災害公営住宅など、新たな町が作られはじめている様子が見て取れた。
災害公営住宅前の道路より海側には、今後、復興祈念公園が作られる予定だが、工事はあまり進んでいない。

岩手県データ(2017 年 6 月末時点)　(※数値は、岩手県・復興庁 HP より)
応急仮設住宅等入居者数　10,671 人(うち、プレハブ仮設住宅入居者 8,486 人　入居率　36.4%)
県外避難者数　1,307 人　災害公営住宅　進捗率　79.0%

宮城県データ(2017 年 6 月末時点)　(※数値は、宮城県・復興庁 HP より)
応急仮設住宅等入居者数　14,054 人(うち、プレハブ仮設住宅入居者 8,054 人　入居率　23.8%)
県外避難者数　5,317 人　災害公営住宅　進捗率　88.7%

今後とも、東日本大震災復興支援活動へのご支援・ご協力をお願いいたします。

【募金受付口座】　郵便振替番号：00170-5-95979　　加入者名：カリタスジャパン
※振込用紙の通信欄　□呼びかけ中の募金（　　）内に、〈東北地方太平洋沖地震　または　東日本大震災〉とご明記ください。

【ボランティア募集】
各カリタスベースでのボランティア活動をご希望の方は、各受付窓口までご連絡ください。

【ニュースレター　メール配信】
ニュースレターは、HP 掲載の他、メール配信を行っております。ご希望の方は、お名前などをご記入の上、
ｓｄｓｃｋｏｈｏ(オウ)@ｇｍａｉｌ(エルドット).ｃｏｍ(オウ)　までメールをお送りください。
(仙台教区サポートセンター活動日記の HP にて、これまで発行した全てのニュースレターがご覧いただけます。)